

---

# 文藝部 夏号 風鈴

Chaco

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

文藝部 夏号 風鈴

### 【Nコード】

N4511M

### 【作者名】

Chaco

### 【あらすじ】

登場人物の名前はご自由にどうぞ。

（前書き）

文藝部 夏号 風鈴  
です（ね）

ちりりん。風鈴が涼しげな音を立てて鳴った。

「んで、今日はいつまで粘るんですか？」

僕が聞くと、縁側に座っていた彼女は首をくるりと回して壁にかけてある時計を見た。

「うゝんっ。もうPM・9：00か。でももうちょっと粘ろうかな？」

そついうと手に持っていたアイスクャンディーを一口食べた。

「くゝっ！冷てえゝ。やっぱガソガソ君はうめえゝ！」

「もう。いい加減、毎日うちに通ってアイス食い散らかすの止めてもらえませんか？」

彼女が初めてうちを訪ねてきたのは一週間ほど前のことだ。

「あのお、すみません。」

僕が玄関に出て行くと彼女は可愛らしくにこつと微笑んだ。

「あの、私お兄さんの大学のお友達なんですけど。お兄さんいるかな？」

僕の兄は毎日遅くまでバイトに行っていて夜遅くまで帰ってこない。  
「今バイトです。」

僕がそっけなく言うとな彼女はふふつと笑った。

「何時に帰って来るのかな？」

「分かりません。不規則だから。」

「PM・9：00までに帰ってくるときもある？」

「ありますけど……？」

すると彼女は自分の腕時計を見てから言った。

「今はPM・7:00だから……。お兄さんが帰ってくるまで少し待たせてもらえる？ どうしても直で言わなきゃいけないことがあるんだよね。」

「そんなの大学で言うてくださいよ。」

「学部が違うからなかなか会えなくて……。」

「何か待ち合わせとかすればいいじゃないですか？」

「だって彼、忙しいじゃん？」

確かに兄は忙しかった。昼間は大学に通って夜はバイト。自由時間なんてほとんどない。

「ということで！」

彼女はさっさと靴を脱いで綺麗に並べた。

「おじやましあゝす！」

結局その日に兄が帰ってきたのは深夜で、彼女の帰った後だった。同じようなことがここの一週間程続いていた。彼女はやがてうちが自分の家であるかのように振る舞い、うちのアイスを食い散らかすようになった。

「暑うゝいつ！」

彼女はそう言っただけで着ていた半袖のパーカーを脱いだ。そこで僕は回想から引き戻された。そしてふと彼女に視線を戻した。すると暗がりの中に、ノースリーブのシャツから出ている彼女の滑らかな肩の曲線が見えて、僕は一瞬ドキッとした。

「ぼく、喉渴いたから麦茶でもちようだい。」

彼女は僕のことを“ぼく”と呼ぶ。僕はもう中学生なのに、彼女には子供にしか見えないのだろう。…少し、少しだけ…寂しい。

「はいはい。ここを誰のうちだと思ってるんですか…？」

「もちろん、私の領土さっ！」

「はいはいそうですね、地主さん。」

僕はそんなことを言いながら麦茶を汲んで運んできた。

「おっ！サンキュっ！」

彼女は、ショートパンツから伸びたすらりとした細長い足をぶらぶらさせながら麦茶をぐびぐびと飲み干した。

「お兄さん、いつ帰ってくるかね？」

「さあ？相当バイトが忙しいみたいですよ？」

「一週間もぶっ続けで遅くまで働いてて大丈夫なの？」

彼女の心配そうな声色に少し複雑な気持ちになった。

「結構疲れがきてるみたいです。」

「そりゃそうだよね……。」

そこで彼女は少し考え込んだ。

「でもさ、何でそこまでやるの？」

「……」

僕は少しためらってから言った。

「うち、最近父がいなくなっただんです。それで母のパートだけじゃ家計のやりくりが難しくなって、兄もバイトを増やしたんです。僕はまだ中学生だから何もできなくて……。」

「……大変なんだね……。」

「ただいま……。……！」

やっとPM・9:30を過ぎたところに兄が帰ってきた。

「あつ、兄さん。この前言った、大学のお友達が来てるよ？」

「……お前だったのか？」

兄は僕の話など聞こえないようだった。ただ彼女のことをじつと睨んでいた。それは誰が見ても異様な光景だった。

「やっと会えたね。一週間通ったかいがあったよ。」

最初に張り詰めた空気を破ったのは彼女だった。彼女からはさつきまでの優しい笑顔が消えていた。唇の端をあげて笑っている彼女の顔は恐ろしかった。

「ちよつと来い。」

兄は彼女の腕をむんずと掴み、家を出て行った。窓から見ると近く  
の公園に向かう二人の姿が見えた。

二人は30分たつても一時間たつても戻ってこなかった。僕はさすがに心配になって公園へ行ってみた。

「兄さん……。兄さん？」

この公園は木が多くて二人はなかなか見つからなかった。しばらく歩いていると二人を見つけた。

「……！！！！！！」

兄は彼女に殴りかかっていた。彼女の唇の端から血が滲み出していた。

「兄さんっ！！！！！！」

僕は駆け寄って兄の腕を全力で引っ張った。

「ぼく、いいトコで来たね。」

彼女は腕で口を拭って言った。

「ねえ、知ってる？あんたの親父がいなくなったのはあんたのせいなんだよ？」

「てめえっ！！」

僕の力が緩んだのを見計らって兄は彼女を思いっきり殴った。彼女の身体がぐらりと揺れて地面に倒れた。

「兄さん、止めてよ！僕、知ってるよ？」

家に帰って、僕は兄に全てを聞いた。兄と彼女は合コンで出会ってつい最近まで付き合っていた。兄は彼女になら何でも話していた。しかし父がいなくなっとうちの家計は苦しくなり、兄は忙しくなった。そこで兄は彼女に別れを告げたのだ。兄と歳がかなり離れていた僕はそんなこと全く知らなかった。けれど彼女は諦められなかった。そこで彼女は兄を脅してよりを戻そうとしたのだ。

『私とよりを戻さないで、あんたの弟に“あんたの親父がいなくなつたのはあんたのせいなんだよ？”って言っちゃうよ……？』

と言って……。しかし僕はそんなこと知っていた。僕は父の子じゃない。父はそれを最近知り、ショックを受けて出て行ったのだ。

「兄さんもバカだな……。」

そんなこと知っていたのに。僕はもう子供じゃないのに。僕はちらりと兄の部屋のドアを見た。彼女は兄に殴られて軽い脳震盪を起こしたらしく、気絶してしまったので僕と兄とでうちまで運んできて兄の部屋で寝かせている。兄は今近くのコンビニまで買い物に行っている。ふいに彼女のことを心配になってそつとドアノブに手をかけた。ガチャ。彼女は気がついたのかベッドに腰掛けていた。そして手にはきらりと光るものを握っていた。彼女の手首からはどす黒い液体が滲み出していた。僕はとっさに彼女が持っていたナイフを奪い取った。

「ごめんね、ぼく。だめだね私って。」

そう言っただけで彼女は顔を覆った。

「私、あの人がいないと生きていけない。でも勇気がなくて死ぬことも出来ない。」

僕は話を聞きながらぎこちない手つきで彼女の腕を縛って止血をし



た。

「ねえぼく、いつそのこと君が私を殺してくれないかな？」

彼女は優しく微笑んだ。僕はその笑顔が愛しくてたまらなくなった。

「分かりました。目を瞑ってください。」

彼女は恐る恐る目を閉じた。僕はナイフを近くの机においた。そして一度だけ彼女を、強く…強く抱擁した。彼女は驚き、ゆっくりと眼を開けた。

「あなたは兄がいなくても生きていける。兄はあなたの全てじゃない。これからだって、兄よりもずっとずっと深くあなたを愛してくれる人が出てくるかもしれない。」

彼女の瞳に涙があふれた。

（後書き）

文藝部 夏号 風鈴  
です（ね）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4511m/>

---

文藝部 夏号 風鈴

2010年10月16日13時29分発行